



キリシタン語彙・渡来語の受容史

人間文化学部 国際文化学科
准教授 小川俊輔（おがわ しゅんすけ）

連絡先 県立広島大学 広島キャンパス 1913 号室
Tel 082-251-5178 (代表) Fax 082-251-9405 (代表)
E-mail bach@pu-hiroshima.ac.jp



専門分野： 地理言語学 社会言語学 日本語学

キーワード： キリシタン語彙 渡来語 Geolinguistics
キリシタン文学 南米日系移民

● 現在の研究について

1. キリシタン語彙の受容史

1549 年のザビエル来日を端緒とするキリシタンの伝来により、16 世紀中葉以降、西洋から数多くの言葉が輸入されることになりました。その多くはラテン語とポルトガル語で、スペイン語も含まれていました。今日でも耳にする「キリシタン」、「バテレン」、「クルス」などの語は、16 世紀から使われてきた言葉です。キリスト教に関係するこれらの言葉を「キリシタン語彙」と命名し、主に九州地方における受容の歴史を、フィールド・ワークと過去の歴史的文献史料から考察してきました。

2. 渡来語の受容史

「キリシタン語彙」とともに、「パン」、「ビードロ」、「金平糖」、「カステラ」、「カップ」などの一般の語も、たくさん日本に入ってきました。これらの語は普通「外来語」と呼ばれますが、特に、16・17 世紀にキリシタンの伝来に伴って輸入されたポルトガル語・スペイン語を「渡来語」と名付け、その受容史を明らかにしたいと考えています。

3. 歴史社会地理言語学の方法による語史研究

これまでの伝統的な日本語史の研究手法は、「文献史料から言語についてのみ考える」というものでしたが、近年では、文献が書かれた時代の時代状況や文献の社会的・地理的な位置づけ（位相差）に目を配る研究が増えてきています。私も、社会的・地理的視点を取り入れた語史研究を目指して研究を進めています。

● 今後進めていきたい研究について

1. キリスト教用語の一般語化

「天国」、「救世主」、「三位一体」など、明治時代にはキリスト教会内部で使用されていた言葉が、最近では一般語として使われるようになってきています。その契機や理由、伝播の過程などについて、今後、研究したいと思っています。

2. 炭鉱労働者・移民の言語生活史

禁教時代に厳しい生活を余儀なくされたキリシタンの人々は、江戸時代末期以降、新天地を求めて移住を繰り返し、あるときには国内開拓移民として、またあるときには、炭鉱労働者として、また、一部の人々は海外に移民として渡っていきました。彼らが、いかにしてキリスト教信仰を守り、キリシタン語彙を伝えてきたのかについて、少しずつ調査・研究を進めています。キリシタン語彙・渡来語の記述にとどまらず、血の滲むような努力をされて今日を迎えられた偉大な先人たちの言語生活史を書き残す仕事ができればと思っています。

3. キリシタン文学の水脈

北原白秋・木下杢太郎の「南蛮趣味文学」、芥川龍之介の「切支丹物」、遠藤周作『沈黙』など、連綿と書き継がれてきたキリシタン文学の水脈をたどる仕事も、課題の 1 つです。

● 地域・社会と連携して進めたい内容

1. 以上に記した研究内容について興味を持ってくださる個人・機関の皆様と、積極的に連携していきたいと考えています。

● これまでの連携実績

1. <長崎から世界遺産を「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」>の活動への協力（長崎県）。